医療法人 創起会
くまもと森都総合病院

病院だより
2019年 7月 第21号

ご挨拶

医療法人創起会　くまもと森都総合病院
統括副院長　西村 令喜

暑中お見舞い申し上げます。
日頃より何かとご指導・ご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

去る6月28日にホテル日航熊本で開催しました「令和元年度　地域医療連携の集い」には200名を超す方々がお忙しい中、ご出席賜り誠に有り難うございました。改めてお礼を申し上げます。

当院の果たすべき役割として挙げていますのは、1．がん診療、2．専門性を持った医療、3．地域に根ざした医療連携、4．医療人育成、5．社会への啓蒙および貢献、です。前述の地域医療連携の集いはまさしく項目3に基づいたものですが、当院の持つ診療の特徴、専門性、そして実績を理解していただき、今後の連携に繋いでいきたいと考えています。当院における昨年度の紹介率は43.7%、逆紹介率は32.4%でした。まだまだ十分とはいえない数値で、さらなる上昇、連携の充実を図っていきたいと考えています。今後、各診療科において患者さんに連携可能な医療機関を提案させていただき、患者さんの意向を踏まえ、積極的に逆紹介を進めていく方針です。地域医療連携室から医療機関各位にご連絡させて頂くことになるかと思いますので、よろしくお願いいたします。

しかしながら、これまで不十分であった連携が一朝一夕に充実するとは考えていません。まだまだ連携への取り組みに課題が多いと認識していますので、是非とも厳しいご意見、ご助言をいただけたら幸いです。
引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

診療科紹介　　ー血液内科ー

血液内科部長　下村泰三

5月1日、新天皇の即位に伴い平成から令和に年号が変わり、新しい時代の幕開けに身が引き締まる思いがします。振り返ると平成の時代は阪神淡路大震災や東北大震災、さらに熊本地震など天変地異が多かった気がしますが、令和の時代はどうなるのでしょうか。平安であることを祈るばかりです。

さて、当科では主に白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの血液悪性腫瘍を中心に診療を行っています。また良性疾患としては再生不良性貧血や自己免疫性血小板減少性紫斑病などの難治性血液疾患などの治療や、その他にも貧血や血小板減少などの血液検査値異常やリンパ節腫脹などの血液疾患が疑われる症例全般の精査、加療も行っています。

無菌室が8床ありますので、急性白血病や自己末梢血幹細胞移植の際に行う大量化学療法など重篤な骨髄抑制を起こす治療も行っています。ただし、兄弟間や臍帯血あるいは骨髄バンクからの移植が必要な場合は熊本大学病院や熊本医療センターに紹介しています。

血液悪性腫瘍の治療については日本血液学会による造血器腫瘍診療ガイドラインに準じて診療を行っています。白血病については日本成人白血病治療共同研究機構（通称JALSG）の行っている臨床研究にも参加しています。多発性骨髄腫の治療は近年大きく変わり、プロテアソーム阻害剤や、免疫調整薬、あるいは抗体療法などが主流になりさらにそれらを多剤で併用する時代となり、大きく予後の改善が見込まれるようになりました。当院でも新規薬剤を主軸にした多剤併用療法を積極的にとりいれて治療成績が向上してきています。

白血病や悪性リンパ腫は現在でも多剤併用の抗がん剤による化学療法が主流です。しかし今後、各種抗体療法や分子標的治療薬、ニボルマブやペムブロリズマブなどの免疫チェックポイント阻害剤、話題のキメラ抗原受容体発現T細胞（CAR-T）療法など高額な新規治療が登場するに従い、治療成績も腫瘍の種類によっては格段に向上してくると期待されます。

ただし、それらの治療法には利点とともに欠点もあるわけで、我々血液内科専門医はその適応をしっかり見定め、必要によりそれら新規薬を含めた治療法を提示あるいは実践できる知識が必要となりました。まさに血液内科医としてさらに専門性が問われる時代になってきたと思います。

当院には現在4名の血液内科専門医が在籍しており、そのような時代の流れに対応すべく常に情報交換し合いながら診療を進めています。

平成30年度の当院の主な新規血液疾患患者の内訳

急性骨髄性白血病	7
急性リンパ性白血病	6
骨髄異形成症候群	23
慢性骨髄性白血病	1
悪性リンパ腫	57
多発性骨髄腫	10
骨髄増殖性腫瘍	15
自己免疫性血小板減少性紫斑病	14
再生不良性貧血	4

平成30年4月～平成31年3月

マンドリンコンサート

4月18日(木)熊本マンドリン協会さんによる「夕べのコンサート」が当院1階ロビーにて開催されました。たくさんの楽器から奏でられるなつかしのメロディーにとても心を癒されました。
70名ほどの患者さんとご家族の参加があり、職員も一緒になって自然と口ずさんだり、リズムに乗って手拍子したり、とても盛り上がった会になりました。初めてみる楽器も多数あり、とても楽しい体験でした。

看護の日イベント

毎年5月12日はナイチンゲールの誕生日にちなみ、「看護の日」に制定されています。
当院では5月13日(月)に、看護に親しんでいただけるイベントとして看護師による血圧測定、手洗いチェック、そして栄養士・ソーシャルワーカー・理学療法士・医師による各種相談を行いました。

眼科からのお知らせ

OCT(眼底3次元撮影装置)を導入しました

OCTとは、Optical Coherence Tomography(光干渉断層計)の略で、光の干渉現象を利用して網膜や角膜の断層を画像化できる眼科機器です。当院には、本年2 月 20 日に導入されました。OCTは網膜疾患、角膜疾患移植眼、緑内障に対応しています。使用できる範囲が広く、検査時間も短いため1日に多くの患者さんを検査できます。OCT導入後2ヶ月間で603件の検査を行いました。
従来の眼底写真撮影では、網膜の表面しか撮影できませんでしたが、OCTでは網膜上や網膜内また脈絡膜の病変まで断層画像として三次元的に詳しく捉えることができます。このことにより黄斑変性、糖尿病網膜症、ぶどう膜炎、緑内障、その他様々な眼疾患の微細な変化も鮮明に捉えることができるようになり、診断や経過観察の精度が大きく向上しました。
また、OCTを撮影する際は、眼科診療につきものの光による眩しさや、風圧を使って眼圧を測定するときの痛さなどは全くありません。一回の撮影時間は数秒程度なので患者様は数秒から1～2分間椅子に座ってOCTの前に顔を置くだけで検査は終了します。また、今回導入したOCTには光干渉断層血管撮影(OCTアンギオグラフィー)の機能が付いています。今までは、糖尿病網膜症患者に対する蛍光眼底造影検査の時などには造影剤を使用していましたが、OCTでは造影剤を用いることなく眼底の血管の走行、血流や新生血管の発生などを三次元的に評価することが可能になりました。造影剤を使用しないのでアナフィラキシーショックを起こすリスクや、注射の痛みもありません。このようにOCTを導入することにより、患者様の身体的また心理的負担を軽減することができました。
(報告:視能訓練士 吉田幸代)

看護師新人研修が終了しました

新人研修カリキュラム

1 週目

・入職者全員で就業規則や福利厚生などの説明、社会人としての心得や医療職としての基礎知識に関する講義

・感染管理や医療安全、防災や接遇、他職種から専門性の高い基礎的な講義

2 週目　　・　電子カルテの取り扱いについて

3 週目　　・　ローテーション研修（今年度より導入）

すべての病棟を1日ずつ体験し、当院の診療機能の特性を知る

4～5週目　・マニュアルに沿った看護技術に関する講義、演習

モデルを用いての演習では、医材を使って実際に行うとなかなか思うようにはいかず最初は戸惑っているようでしたが、一生懸命取り組んでいました。採血の練習では、新人看護師同士で練習台になり、何度も何度も練習を重ねる真摯な姿が見られました。

最終日は毎日の学びをまとめ、研修の成果を発表しました。組織の一員としての心得や身だしなみ、他職種の役割を理解でき、自分の『強み・弱み』に気づくことができました。『強み』は生かし、『弱み』は改善していくこと、そして、『患者さんのためにできることは』と、それぞれの思いや気づきをしっかりと発表できていました。5月より、それぞれの部署へ配属されました。新入職員がキラキラとした眼差しで、笑顔で患者さんに寄り添った看護ができるよう、看護部全体で育ててまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

地域医療連携の集い　開催報告

令和元年6月28日（金）ホテル日航熊本にて『令和元年度　地域医療連携の集い』を開催いたしました。地域医療連携の集いは、地域の医療機関・施設との連携を深め、相互の機能連携を通して地域医療へ貢献することを目的に年1回開催しています。本年も地域の先生方はじめ様々な職種の方に多数ご参加いただき、当院職員と合わせて260名余りでの開催となりました。第一部講演会では、藤山院長開会挨拶のあと、下村泰三血液内科部長より「当院における血液悪性腫瘍の治療について」の講演、次に吉田地域医療連携室長より当院の概要、昨年度の診療実績、本年度の診療体制などについて報告をさせていただきました。会場を移し、第二部懇親会では、鶴田胃腸科内科医院　理事長 鶴田昭先生よりご挨拶ならびに乾杯のご発声をいただき、その後の懇親会場ではご参加の皆様より貴重なご意見やアドバイスを頂戴しました。本会にていただきましたご意見を今後の病院運営に役立てさせていただき、診療機能のさらなる充実を図りながら、充実した連携体制を築いていけるよう尽力してまいります。

（報告：地域連携副室長　橋本和幸）